

**Working Paper on Social-Ecological Resilience Series  
No. 2008-005**

丘陵地におけるトンガの生業活動

—ザンビア南部一農村の事例から—

**The Livelihood of ‘Escarpment Tonga’:  
A Case Study of One Village, Southern Zambia**

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

中村 哲也

By

**Tetsuya NAKAMURA**

**Graduate School of Asian and African Area Studies  
Kyoto University, Kyoto, Japan**

**January 2009**

**Vulnerability and Resilience of Social-Ecological Systems**

RIHN Research Project E-04

**Research Institute for Humanity and Nature (RIHN)**

Inter-University Research Institute Corporation, National Institutes for the Humanities

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
総合地球環境学研究所

**Working Paper on Social-Ecological Resilience Series  
No. 2008-005**

丘陵地におけるトンガの生業活動  
—ザンビア南部一農村の事例から—

**The Livelihood of ‘Escarpment Tonga’:  
A Case Study of One Village, Southern Zambia**

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

中村 哲也

By

**Tetsuya NAKAMURA**

**Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University  
Kyoto, Japan**

**Email: [tetsuya@jambo.africa.kyoto-u.ac.jp](mailto:tetsuya@jambo.africa.kyoto-u.ac.jp)**

**January 2009**

**Vulnerability and Resilience of Social-Ecological Systems**

RIHN Research Project E-04



**Research Institute for Humanity and Nature (RIHN)**  
Inter-University Research Institute Corporation, National Institutes for the Humanities

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
総合地球環境学研究所

## 要旨

1950年代後半、ザンベジ川の中流域にカリバダムが建設されたことによって巨大な人造湖（カリバ湖）が形成され、5万人以上のトンガの人々の居住地が失われてしまった。湖畔の平地へと追いやられた彼らは、逆境を跳ね返すかのように、カリバ湖と密接に関わりながら様々な産業を発展させていった。しかし、急増する人口、頻発する干ばつによって土地不足が蔓延化し、不安定な社会経済的要因が地域経済を悪化させ、こうした背景のもと、数千世帯が湖畔から再度移住していったと言われている。ほとんどは高地を目指して移り住んでいったが、一部は<sup>きょうあい</sup>峽隘な尾根や溪谷を有する丘陵地を居住地に選んだ。

沃地や広く平らな土地は限られており、傾斜地での耕作は土壌流出を招くため、概して丘陵地は農業に不適な土地であると言えよう。本稿は、2006年8月から2007年6月の10ヶ月間、ザンビア南部の丘陵地に位置する一農村でおこなった実地調査によって得られた資料に基づき作成されたものであり、丘陵地という新たな生態環境の中で人々はどのように生活を営んでいるのか、移住の歴史と社会構造との関連で考察することを目的としている。

そこから見えてくるのは、傾斜地を選択的に農地として使用し、木挽き業に代表されるような地域の資源を最大限利用する生業を多岐に展開しているという、丘陵地で生き抜く人々の姿であった。現在の生業や資源へのアクセスに関して、はじめに入植した草分けとの繋がりを持つ世帯に有利性を認めることができるが、親族関係に限定されない相互扶助的關係も垣間見られたのである。

**キーワード：** トンガ、移住、丘陵地、生業、木挽き業

## Abstract

In the late 1950s, a huge artificial lake (Lake Kariba) was emerged by the construction of 'the Kariba dam' at the middle Zambezi River. Over 50,000 'Tonga' people lost their land. Against their will, they were forced to move to a flat plane area along the lake which is called 'Valley'. People made efforts to overcome the adverse condition in the area by developing a variety of industries closely associated with the Lake Kariba. However, the efforts they made were in vain because of land shortage spurred by rapid population increase and frequent droughts. The unfavorable local economy which was exacerbated by unstable social/economic factors also aggravated the situation. It was said that several thousand households migrated out from the lake side: While a majority moved to the 'Plateau' area, a minority shifted to the 'Escarpment' area where there are ridges and valleys.

Escarpment land is unsuitable for extensive agricultural production because of limited fertile land and danger of soil erosion. But many of those shifted from the 'Valley' have settled there. I have done field-work at one village located an escarpment area in Southern Zambia from August 2006 to June 2007 to examine and analyze the livelihoods of these people.

We observe that they selectively utilize slope as farmland, and diversify their daily activities to use available resources such as lumbering to the maximum. As for access to livelihoods and resources, the 'pioneer' families and their relatives have advantage, but it is verified that mutual help relation which extends to out-of-kinship line.

**Key Words:** Tonga, Migration, Escarpment, Livelihood, Lumbering

## 目次

1.0. はじめに	1
1.1. 調査方法	4
2.0. 調査地概要	6
2.1. M村の生業	7
2.2. 移住の経緯と親族関係	9
3.0. 自給農業	13
3.1. 地形による土地の使い分け	14
3.2. トウモロコシの自給	18
4.0. 木挽き業	19
4.1. 作業工程とユニット	19
4.2. 木挽き業の経済性	22
4.3. 板の仲買	24
5.0. まとめと結論	25
参考文献・参考URL	31
謝辞	33

### ○本文の表記方法について

- ・学名は、イタリック体のローマ字で表記した。
- ・現地語（トンガ語）は、イタリック体のローマ字に下線を付して表記した。
- ・それぞれの世帯に付した世帯番号はイタリック体の数字で表記した。
- ・現地通貨であるザンビアン・クワッチャ（ZMK : **Zambian**

Kwacha）は数字の前に“**K**”を付して表記した。

K3,500≒100円（調査期間中）

## 1.0. はじめに

1950年代以前、グウェンベ・トンガ (Gwembe Tonga : 以下「トンガ」と表記) と呼ばれる人々が北ローデシア (Northern Rhodesia : 現在のザンビア) と南ローデシア (Southern Rhodesia : 現在のジンバブエ) の国境であるザンベジ (Zambezi) 川中流域で農業を中心とする生活をしてきた。彼らは19世紀以前からこの河川域に暮らしていた先住民であるといわれているが、その出自は明確にされていない [Jaspan 1953]。彼らは、ザンベジ川の氾濫を避けるため、雨季になるとアップランドでモロコシやトウジンビエなどを栽培し、乾季には水が引いた後の氾濫原でトウモロコシを栽培するなどして、年間を通して農業をおこなっていた。洪水によって肥沃な土壌がもたらされるため、河川氾濫原は農地として積極的に利用され、穀類だけでなく野菜や換金作物のタバコなども栽培されていた [Scudder 1962]。

1950年代後半、イギリス植民地政府が断行した電源開発を目的とするカリバダム (Kariba Dam) の建設によって彼らの生活は一変してしまう。1958年の竣工後、堰き止められた水は5年をかけ、長さ280km、表面積5,200k m<sup>2</sup>の巨大な人造湖を形成した。その結果、約57,000人のトンガの人々が居住地を失い、移住を余儀なくされた [Colson 1960]。再定住計画も植民地政府によって進められたが、浸水予定地への告知が遅れるなど計画には不備が多く、地元住民からの反発は暴動にまで発展した [Magadza 2006]。再定住地として用意されたのは痩せた土壌が広がる、標高500mの湖畔の平地 (Valley : 以下「低地」と表記) であった (図1)。農業「適地」から農業「不適地」へと追いやられた彼らは、湖と密接に関わりながら様々な生業を展開していった。

低地への移住直後から、人々は水が引いた湖岸を利用したトウモロコシ栽培を始めた。これは、カリバダム建設以前にザンベジ川の江畔でおこなわれていた農業と同様の方法であると考えられる。1964年の収穫量は、農業省の役人が「低地で過去最高の収穫量」と称するほどであった [Scudder 他 1982]。

湖の形成は植生に影響を与え、ハイキビ (*Panicum repens* : *nzinze*) が湖岸一帯を覆っていき、ハイキビはウシや小家畜の餌となるため家畜を増やすことが可能になった。このことは、これまでおこなわれていた手鋤耕作 (hoe cultivation) からウシに犁をかせる犁耕 (ox plowing) への切り替えという、農業技術の革新を促すことになり、1970年代にはグウェンベは換金作物であるワタやヒマワリの栽培が進展した。

また、カリバ湖では魚が大量に繁殖し、漁業の経済的比率が高まった。刺し網やボートを所有する男性たちは漁業を営むことによって現金を獲得し、周辺の住民もフィッシング・キャンプ<sup>1</sup> (fishing camp) で農産物や地酒を販売するなどして収入を得ることができた [Scudder 他 1982]。

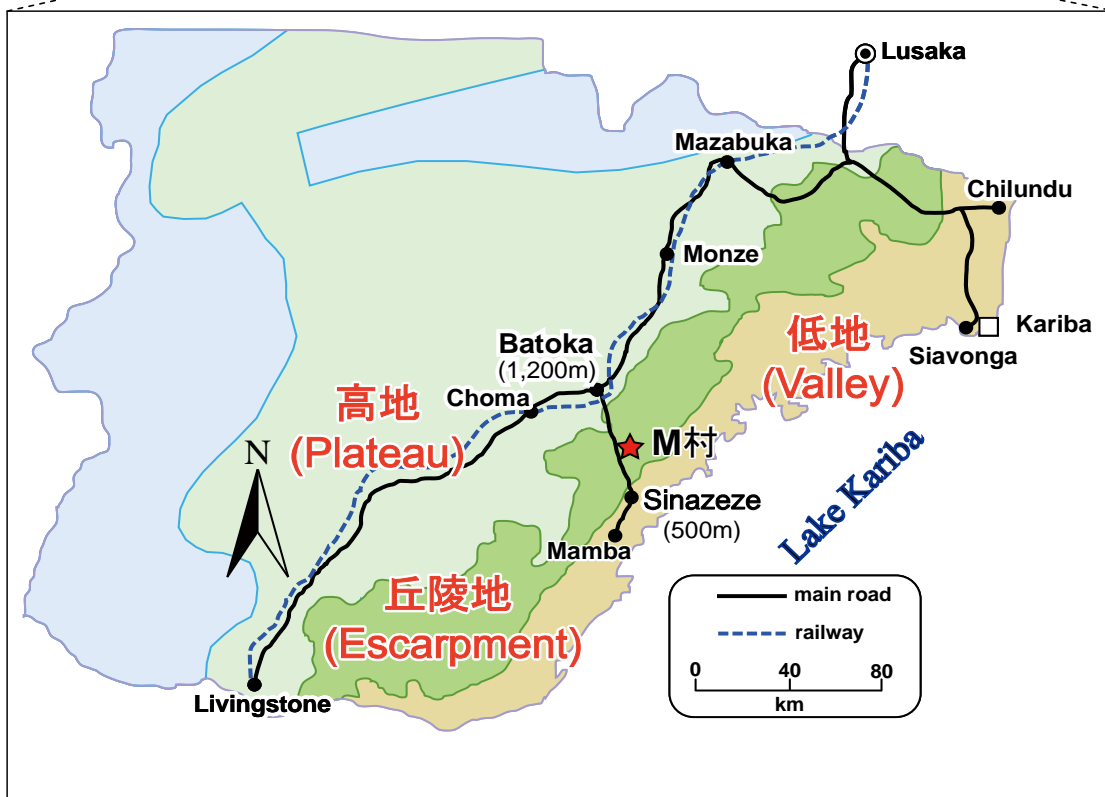


図1 調査村の位置

注) FAO (1993), Southern Food Security Project, No.137/93 をもとに筆者作成。

1960年代後半には、小魚のカペンタ<sup>2</sup>がタンガニカ湖からカリバ湖に導入された。カペンタ漁は白人経営<sup>3</sup>の会社によって営まれ、多くの地元民の雇用を生み出した<sup>4</sup>。近年では、好調なザンビア経済の影響を受けて都市部のカペンタ需要が高まっており、カペンタ漁会社は経営を拡大しながら漁獲高を年々伸ばしている<sup>5</sup>。さらに炭鉱や大規模農場なども低地に設けられ、地域住民の雇用機会が増加していった。

このように、農業、漁業をはじめとする産業の新たな展開を認めることができる。だが、痩せた土地での人口増加や、干ばつの頻発、さらには隣国ジンバブエの戦争にも巻き込まれ、低地一帯は慢性的な貧窮に陥ってしまった。

湖の水位変動が不規則であり耕作する時期の判断が困難であったため、はじめは順調であった水位の昇降を利用したカリバ湖畔での農業は地域住民の間であまり普及しなかった。もともと干ばつ常襲地である低地には天水農業に適した土地が少ないため、乾季作の水源を確保しようと、湖へ流れ込む支流域に人々が集中していった。だが、沃地である支流域はカリバダムが建設される数十年前から利用されていたため、後からこの土地に入ってきた新参者が農業適地を手に入れることは難しかった。その結果、ダム建設で土地を失った者たちは、使われることなく残されていた荒蕪地<sup>（こうぶち）</sup>を耕す他に方法は無かった。さらに、ヨーロッパ人やザンビア人の富裕層が、農場、クロコダイルファーム、観光客向け施設、カペンタ漁会社などを運営するために湖畔の土地を大規模に買い占め、地域住民は必然的に土地不足に陥ってしまった〔Magadza 2006〕。特に状況が深刻だったのは若い夫婦たちであり、親の世代から土地を譲ってもらうことが期待できなかったため、現金を支払って借用するか、村から遠く離れた未利用地を開拓するなどして耕作地を確保するしかなかった。また、樹木は燃料や薪炭材、または炭鉱の支柱として伐採されたため、低地の森林は早い時期に姿を消していったという〔Cliggett 他 2006〕。

深刻なことに、1975年から1980年の間、グウェンベはローデシア戦争<sup>6</sup>の戦渦に巻き込まれ、すべての産業は打撃を受けた。湖の交通手段でもあった漁船は沈められ、道路や橋梁も地雷で破壊されてしまい、低地の物流は止まってしまった。NGOや政府の援助によって建設された学校、病院、灌漑施設、ツェツェ蠅駆除をおこなう検問などは機能を失い、農業や漁業の技術普及員はグウェンベから逃げ出してしまった。当時の低地は「自力では抜け出せないほどの貧困の中にあった」〔Scudder 他 1982〕といわれている。

この状況を打破しようと低地から離れる人々が現れた。1970年代までの移住先として首都のルサカ（Lusaka）などの大都市が主流であったが、1980年代以降、農村地方に移り住む人が増えていった。1979年、ザンビア政府が中央州と南部州をまたぐ6つの野生動物保護区<sup>7</sup>を居住地として開放したことが契機となり、数千もの世帯が標高1,000メートル以上の高原の台地（Plateau：以下「高地」と表記）へ移住していった。広大な天然林が切り拓かれ、犁やトラクターを使って都市に供給できるほどのトウモロコシが大々的に生産された。



また、野生動物の肉が高値で取引されるため狩猟が盛んにおこなわれ、高地の経済は繁栄していったという〔Cliggett 他 2006〕。

低地からの移住者は高地の辺境での開拓を成功させたのだが、1990年代終わりから状況が暗転し始めた。ザンビア政府やNGOが野生動物保護のために狩猟を禁止し密猟を取り締まったために、彼らは重要な現金収入源を失ってしまった。さらに、未利用地が拓き尽くされ、その結果、高地においても土地不足を招いてしまったのである〔Cliggett 他 2006〕。

以上が本研究の対象地域における、ダム建設以前から現在までの歴史の概観である。著者が調査をおこなった村人たちのほとんどは、ザンベジ川流域をルーツとしている。しかしながら調査村の住民は「低地」からの更なる移住先として「高地」ではなく、その狭間にある「丘陵地 (Escarment)」を選んだ人々である。

2006年8月、著者は「家族経営のアフリカ小農民が半乾燥地でどのような生業をおこなっているのか」という関心のもと、ザンビア内で年間降水量が最も少ないとされる南部州<sup>8</sup>で調査地を探していたところ、高地から低地に向かう途上で特殊な景観を目にした。それは地平線が広がる高地や低地と違い、起伏に富んだ地形、丘の上に閑散と点在する住居、谷底に生い茂るバナナ、幹線道路沿いに積み上げられた石版や板、そして豊富な森林が一面を覆うといった景色であった。

丘陵地は、低地に暮らす人々にとって魅力的な居住地であったとは言えない。「これまで丘陵地に移住した人は戻ってきており、あのような場所で暮したいとは思わない」と語られ、実際に高地や低地と比較しても人口、人口密度共に少ない<sup>9</sup>。先行研究では「丘陵地に移住したとしても、深刻な土壌流出に悩まされ、数年で引き返してくる」〔Scudder 他 1982〕と説明されているにとどまり、丘陵地に暮らす人々の生活を対象にした調査は未だなされていない。しかしながら、本研究の調査村では1960年代から人々が住み始め、現在も40世帯以上が生活している。そこで著者は丘陵地での人々の歴史や生活を丁寧に掘り起こして描き出したいと考えるに至った。本稿では、低地から丘陵地という新たな生態環境の中で人々がどのような生業を展開しているのかについて、ひとつの農村を対象とし、移住の歴史と社会構造との関連で考察することを目的としている。

### 1.1. 調査方法

ザンビア共和国 (Republic of Zambia)、南部州 (Southern Province) にあるシナゾンゲウエ県 (Sinazongwe District) のM村<sup>10</sup>にて、2006年8月から2007年6月まで計10ヶ月にわたって現地調査をおこなった。本稿は、調査村の生業に関する参与観察と聞き取りを中心として集めたデータを基に作成したものである。調査項目は以下のとおりである。

### 世帯調査と生業調査

調査村の全 43 世帯に対し、家族構成、家財、移住前の居住地、農業、現金稼得活動などについて聞き取り調査をおこなった。

### 食事調査

1 世帯を対象に、2006 年 1 月 30 日から 2 月 7 日の 9 日間<sup>11</sup>、食事調査をおこなった。

### GPS (Global Positioning System) を用いたマッピングと畑の面積測定

GPS (eTrex Summit, Garmin 社) を用いて各世帯の家屋の位置 (緯度・経度) を記録した。

### 木挽き業に関する生業調査

2007 年 1 月から 6 月までの 6 ヶ月間、調査村における木挽き業について村内の従事者 18 人を対象に聞き取り調査をおこなった。板の仲買をおこなっている隣村の商店経営者にも聞き取りをした。

### カリバ湖周辺の低地と M 村以北の高地での聞き取り調査

2007 年 4 月 6 日から 4 月 13 日にかけて、低地と高地のいくつかの農村において村の成立や移住の歴史、生業に関する聞き取り調査をおこなった。

### 植物同定

食用として採集される草本や果樹の枝葉、屋根葺きに用いられる萱、木挽き業の伐採対象木など調査村の人々にとって有用な植物のサンプリングをおこなった。採取したサンプルを標本にし、ザンビア大学生物科学部の Chizumayo 博士と Nyirenda 博士に同定を依頼した。

本稿における「世帯」を、生計を共にする集団と位置づけた。農耕をはじめとする労働を共同でおこない、収穫物や日用品を一緒に消費するような、生産と消費を共にする集団を「世帯」として扱う<sup>12</sup>。調査村のトンガ社会では、夫婦とその未婚の子供たちから構成される核家族が「世帯」として機能しており、夫が「家長」を担うことが多い。杉山 [2007] によると、多くの社会において「世帯」は基本的な社会的・経済的単位のひとつではあるが、様々な社会関係が結節するひとつの点でしかなく、多くの社会的単位の複合が生業の全体像に関わっていると述べている。本稿においても「世帯」の単位を超えた社会的単位にも視野を拡大して人々の生業について考察する。

## 2.0. 調査地概要

南部州は 11 の県で構成されている。調査をおこなったシナゾングウェ県は州の南東に位置しており、さらに 14 の区に分けられる。県の東部はカリバ湖に面し、湖の対岸は隣国のジンバブエである。シナゾングウェ県 (4,860k m<sup>2</sup>) の人口は 80,455 人、人口密度は 16.6 人/k m<sup>2</sup> であり、南部州全体の人口密度 (14.4 人/k m<sup>2</sup>) よりもやや高い [Zambia 2000 Census of Population and Housing]。高地の町バトカ (Batoka : 標高 1200m) から低地の町シナゼゼ (Sinazeze : 標高 500m) を経て炭鉱の町マンバ (Mamba : 標高 600m) に至るまで南北に幹線道路<sup>13</sup>が伸びている (図 1)。

県全体の年平均降水量は 800mm 程度であるが、年毎の降水量の変動が大きい (図 2)。雨季の 11 月頃から 3, 4 月にかけて集中して雨が降り、4 月から 11 月まで乾季であり晴天の日が続く。シナゾングウェ県の中でも降水量や降雨日数は一様でなく、年毎の降水量の変動も大きい。特に狭隘な尾根や溪谷を有する丘陵地では、隣地であっても降水量が極端に違うことも多い [青山 1963]。調査地の植生はミオンボ林帯 (Miombo woodland) であり、マメ科ジャケツイバラ亜科 (*Fabaceae* *Caesalpinioideae*) のブラキステギア (*Brachystegia*) 属などが占有している。

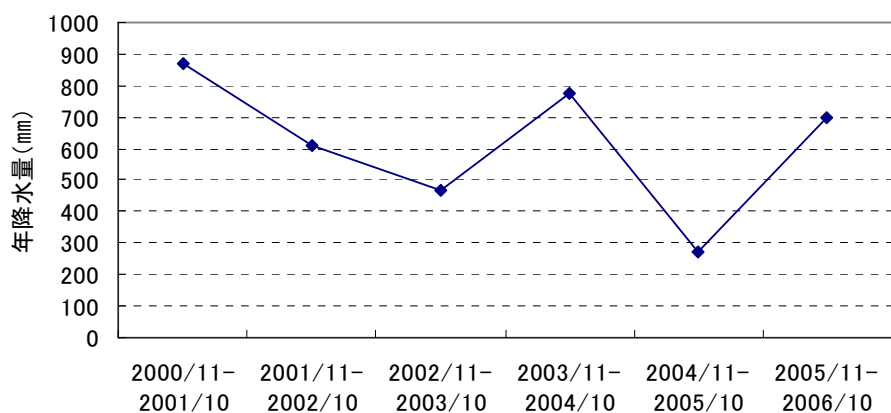


図 2 シナゼゼにおける降水量の経年変動

注 1) 現地 NGO の KDF が収集した雨量データをもとに筆者作成。  
注 2) 2000/2001 - 2005/2006 年度のデータ。

調査村である M 村は、シナゾングウェ県のカンダブウェ区に属し、南緯 17°05'、西経 027°20'、標高 700 - 900m、西側が幹線道路に接しており村境になっている。村の総人口は 270 人、世帯数 43、1 世帯あたりの平均構成人数は 6.3 人、母系制の社会システム<sup>14</sup>をもつことで知られるトンガによって構成されている<sup>15</sup>。家屋は丘の頂上または山腹に設けられ、数世帯がひとつの場所に固まっていることもある。

村から 5km ほど北には野菜市場、10km ほど南にシナゼゼの町があり、どちらにも村人

が訪れる機会が多い。村内でも道路沿いに 2 軒の商店が営業している。塩、サラダオイル、石鹼などの日用品 (groceries) や衣類などを販売しており、多くの村人は「つけ (credit)<sup>16</sup>」でそれらを購入する。それらの商店は、隣村の村長の (M.M.)<sup>17</sup>とその弟の (E.M.) が営んでいる。

## 2.1. M 村の生業

丘陵地に位置する M 村の人々はいかに生計を維持しているのだろうか。結論から述べると彼らは「多種多様」な「生業」を営みながら生活している。それは、雨季と乾季という時季によって変化し、性別による違いや世帯差も存在するが、それぞれの生業は密接に関係し合っているといえることができる。以下では、農業、家畜飼養、採集、現金稼得活動の 4 つに分類して M 村の人々の生業を概観する。

### 農業

詳細は後述するが、調査村では主食作物である穀類のほかに、副食の材料として用いられる数種の作物が栽培されており、ほとんどが自給用である。季節河川沿いに設けられる庭畑<sup>18</sup>では野菜類が灌漑を用いて栽培され、バナナなどの果物と同様に、多くの世帯が市場<sup>いちば</sup>に持って行くなどして販売している。またいくつかの世帯では換金を目的としてワタを栽培している。

### 家畜飼養

村人はウシ (*ngombe*)、ヤギ (*npongo*)、ヒツジ (*debelebe*)、ブタ (*ngulube*) などの家畜類と、ニワトリ (*nkkuku*)、アヒル (*maddada*)、ハト (*nkanga*) などの家禽類を飼養している。これらは貴重な蛋白源として自家消費されるほか、現金やトウモロコシなどが必要なおときには売却・交換したり、婚資として用いたりすることもある。M 村では 20 世帯がウシ (73 頭) を所有しているのに対し、26 世帯が飼育しているヤギ (171 頭) は頭数も他の家畜と比べて多い。ブタ (71 頭) は家庭で消費されることはなく、ルサカなどの街で売られるために飼育されている。

### 採集

調査地では様々な野生の有用植物が利用されている。ほとんどは雨季に繁茂するため、女性たちは農作業の合間にそれらを採集し副食として調理する (表 1)。その中でもデレレ (*delele*) と総称される、葉に粘性のある数種類の植物は雨季の重要な副食源である<sup>19</sup>。

表1 M村周辺で採集可能な副食源となる野生植物

方名	学名	収穫始め	その他
<i>pukume</i>	不明	不明	粘性のある葉
<i>kwasia</i>	<i>Commelina diffusa</i>	雨季の始め-4, 5月	粘性のある葉
<i>lunkomba</i>	<i>Ceratotheca sesamoides</i>	4-10月	粘性のある葉
<i>kwankwa</i>	<i>Corchorus</i> sp.	雨季の始め-4, 5月	粘性のある葉
<i>bonkko</i>	<i>Amaranthus thunbergii</i>	雨季の始め-不明	
<i>isunku</i>	<i>Celosia trigyna</i>	2-3月	
<i>masanze mabelobelo</i>	<i>Portulaca oleracea</i>	雨季の始め-12, 1月	
<i>sibololoz</i>	<i>Polygonum senegalense</i>	一年中	
<i>chamudonga</i>	<i>Alternanthera nodiflora</i>	乾季中	河辺に生える
<i>mupondo</i>	<i>Bauhinia petersiana</i>	不明	煮豆と一緒に食べる
<i>mugongo</i>	不明	不明	ラッカセイのような味
<i>lwidi (lusala)</i>	<i>Scilla</i> sp.	一年中	
<i>mukoloolo</i>	<i>Lanchocarpus capassa</i>	一年中	樹皮と牛乳を煮込むと酸味
<i>siachikwiye</i>	<i>Corchorus tridens</i> L.	雨季の始め-4, 5月	
<i>npoko</i>	不明	雨季の始め-1月	酸味
<i>debelebe</i>	不明	9-12月	調理後ピンク色に変化
<i>kadonkkola mpoto</i>	<i>Galinsoga parviflora</i> (av.)	9-10月	湿地に自生している
<i>masabe</i>	<i>Neorautanenia mitis</i> (A. Rich.) Verdc.	一年中	
<i>mukupwi</i>	不明	12-1月	白いキノコ
<i>kapvuupyu</i>	不明	12-1月	赤・黄のキノコ

注) 2006/2007年度の聞き取り調査と植物同定をもとに筆者作成。

いくつかの野生植物は市場<sup>いちば</sup>で売ることでもできる。例えば、12月頃からの1ヶ月間、様々な色のキノコが山腹の至るところに見られるようになると、女性たちはバケツいっぱいキノコを採集して町で販売する。これらのキノコは低地よりも丘陵地に多く生えるため、低地の市場<sup>いちば</sup>に持っていくと高値で売ることができると彼女たちはいう。他にも「M村でよく採れる」といわれるマサベ<sup>20</sup> (*masabe*) など、換金性のある野生植物が丘陵地には多く自生しており、これらは端境期の貴重な現金収入源となっている。

### 現金稼得手手段

上記の生業以外にも多くの現金を得る方法が生み出された。主に男性が従事しているものには、木挽き業、丸太<sup>21</sup>の販売、家具製作、都市で仕入れた服飾品の販売などが挙げられる。女性の場合、剥離した石版の販売、石炭の販売、萱の販売などがある。男女に共通するものとして、域内の賃労働も頻繁におこなわれていた。ここでいう賃労働とは、現金やトウモロコシと引き換えに、他の世帯の畑で除草をしたり、家を建てたり、トイレの穴掘りをしたりするような雇用労働のことである。雇用主と賃労働者の関係や交渉内容によって若干の変動はあるものの、賃金にはおおよその相場が存在する<sup>22</sup>。

以上のように調査村における生業活動をまとめたが、次章からはトウモロコシの「自給農業」と男性が従事する「木挽き業」について詳細を述べていく。雨季が始まるとM村の全世帯は農地の大部分をトウモロコシ栽培に当て、収穫までの数ヶ月間、家族総出で農作業を

おこなう。結論を先取りして述べれば、村人の生計の根幹にあるのは自家消費用食糧の安定確保にあるといえよう。しかしながら、18世帯が従事し、他の現金稼得手段と比較しても収益が格段に大きい「木挽き業」という食糧生産外の生業もあり、丘陵地における生業の組み合わせの特徴を描き出すために、これについても注目する。

次章に移る前に、調査村の村人たちがどのような経緯でM村に移り住むことになったのか、親族関係と共に明らかにしておく必要がある。なぜならば、それが調査村の生業の形成に深く関わっていると考えられるからである。

## 2.2. 移住の経緯と親族関係

低地を離れることになった理由について、6割の世帯が「土地が痩せて狭かった」など土地不足に起因するものであると述べ、M村にやってきた理由の8割が、「肥沃で広い耕作地が欲しかった」など農業の改善を目的とするものであった。

図3は「M村全世帯の親族関係」と「移住してきた年代」を表しており、それぞれに世帯番号<sup>23</sup>を付したものである。移住の経緯をもとに、全世帯を以下のように分類し本稿を進めていく<sup>24</sup>。

Aグループ（世帯番号 1～15）：1967年に入植した世帯、およびそれらの世帯を伝手に移住してきた15世帯

Bグループ（世帯番号 16～32）：1968年に入植した世帯、およびそれらの世帯を伝手に移住してきた17世帯

Cグループ（世帯番号 33～41）：1990年代以降、親族関係を持たず独自に移住してきた9世帯

小学校教師の世帯（世帯番号 42, 43）：2000年代に移住してきた2世帯

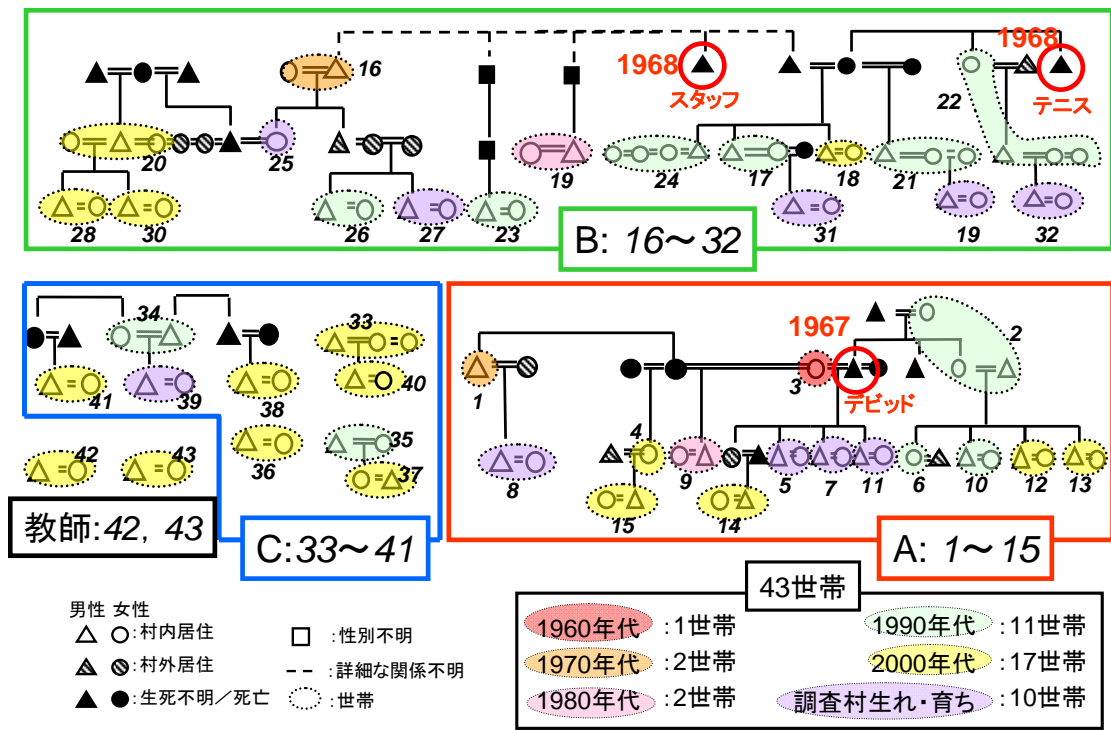


図3 M村全世帯の親族図と移住の年代

注1) 2006/2007年度の聞き取り調査をもとに筆者作成。

注2) 世帯番号をイタリック体の数字で表記した。

### A グループ (世帯番号 1 - 15)

M村<sup>25</sup>に人がはじめて入植したのは1967年のことであり、デビッドを家長とするこの世帯は、同地域における草分け的な存在である。当時のM村はゾウなどの野生動物が闊歩する無人の未開地であり、危険な土地であったといわれている。彼らはもともと低地の村で暮らしていたのだが、耕地面積が不十分だったため、広い土地を求めて丘陵地へ移住してきたのであった。幹線道路の傍に住居を設け、谷部の湿地を開墾し、穀類だけでなく野菜や果物も栽培して暮らしていた。

しかし1988年に世帯主であるデビッドが逝去してしまう。デビッドの実兄弟であるロンドスが、土地、家財、4人の妻(サリア、ドリタ、シアミランドゥ、ノーラ)と子供たちを相続したのだが、彼も1年経たずして亡くなってしまった。次の相続人に選ばれたのが(他に実兄弟がいなかった)実妹であるジャネット<sup>26</sup>(世帯2)であったのだが、彼女はロンドスのように土地や遺族をそのまま相続しなかった。ジャネットは低地の村に住み続けたまま遺族の「相談役<sup>27</sup>」を受け持ち、デビッドが使っていた湿地を全て遺児たちに配分し、彼女自身は牛3頭と犁1つを受け取った。

4人の未亡人の後見人にはデビッドの父方の従兄弟たちが選ばれたのだが<sup>28</sup>、サリア(世帯3)だけがM村に住み続けており、残りの3人は子供を引き連れてすぐに別の土地に移

動した。サリアの子供たちの何人かは M 村で所帯を持っており（世帯 5, 7, 11）、サリアの孫であるアレックス（世帯 14）も叔父のデニス（世帯 7）を頼って低地の村からやってきた。M 村を離れたドリタ、シアミランドゥ、ノーラの子供たちの中には M 村に戻ってくる者もあり、ドリタの息子のミシェック（世帯 9）とシアミランドゥの娘のノラ（世帯 4）は、それぞれ 1987 年、2000 年に低地の村から移住し、自分たちのために遺された湿地畑で農業をおこなっている。ノラ（世帯 4）の息子のクリフォード（世帯 15）は母親と M 村にやってきた後、村長の娘と結婚した。

低地に住んでいたジャネットの一家が、M 村にやってきたのはデビッドが死去した直後ではなかった。彼女の一家はワタ栽培から大きな収入を得ていたので、M 村に移り住む必要がなかった。デビッドと M 村で同居していた実母のマセエは高齢であったため、ジャネットはマセエを低地の村に呼び寄せようとした。しかし、マセエは、湿地畑のバナナを他人に取られてしまうのではないかと心配し、M 村を離れようとはしなかった。そこでジャネットは息子の 1 人を低地の村に残し、1992 年、マセエの住む M 村に移住してきた。現在、ジャネットとその子供たちの世帯（世帯 6, 10, 12, 13）が耕作している湿地畑は、デビッドの土地ではなくマセエから譲与されたものである<sup>29</sup>。

ペンバ（世帯 1）はデビッドの妻であるドリタと兄妹であり、その関係を辿って 1974 年に低地から移ってきた。当時の M 村には人がほとんど住んでおらず、広大な土地を手に入れることができた。息子のディクソン（世帯 8）は M 村で育ち現在では所帯を持っている。また、ドリタの息子であるミシェック（世帯 9）は、2005 年に M 村内で住居を移したとき、叔父のペンバから土地を譲与された。

## **B グループ（世帯番号 16 - 32）**

1968 年、広い農地を求めてスタッフとテニスの 2 世帯が南隣の F 村から M 村に移住し、幹線道路脇の土地で農業をおこなっていた。1970 年にスタッフが死去した後、スタッフの父方の従兄弟であるティックティック（世帯 16）が、遺された 2 人の妻と子供たちの後見人として低地の村から迎え入れられた。しかし、ティックティックと 2 人の妻たちの関係が悪化し、農地の地力も落ちてきたため、1972 年にスタッフの遺族とテニスの世帯はティックティックを M 村に残して F 村に戻っていった。

それから 20 年後の 1991 年、スタッフの 3 人の息子たちである、アルフレッド（世帯 17）、ジン（世帯 21）、ロバート（世帯 24）の 3 世帯が再び M 村にやってきた。同年、アルフレッドとロバートの母方の従兄弟であるサムウェル・マイバ（世帯 22）の世帯も彼らに合流し、4 世帯がひとつの場所に住み、かつてスタッフやテニス耕作していた土地をそのまま農地として利用していた。数年後、彼らは住居を離散させ、農地を新たに開拓していった。アルフレッドの息子のクリストファー（世帯 29）、ジンの息子のチャールズ（世帯 31）、サムウェル・マイバの息子のクリス（世帯 32）は M 村で世帯を持った。アルフレッドの双子の兄弟であるジョン（世帯 18）は、M 村から 5km ほど離れた別村の村長であるが、



農地拡大のため M 村に妻の一人を住まわせている。

アルフレッド、ジン、ロバートが入植した頃は 3 人とも F 村の成員であったために、当時の M 村は「F 村 B」(もともとの F 村は「F 村 A」)と呼ばれていた。F 村 A で集会や行事がある度に F 村 B の住人は数時間かけて低地に出向かなければならなかった。そこで、村の運営を効率的におこなうため、F 村 B を F 村 A から独立して新村を作ることになった。新村の村長を決める際、F 村 A の村長と同じクラン (*mukowa*)<sup>30</sup>の人物を選出する方法が採用され<sup>31</sup>、その結果、ジンが村長、アルフレッドが副村長に選ばれた。1996 年、トンガ語で「酔っ払いが戯れ言をいう様子」<sup>32</sup>を意味する村名を持つ、M 村が誕生した。

M 村に残されたティックティック (世帯 16) は、すぐに息子のパトリックを低地の村から呼び寄せ、彼の拡大家族の土地を拓げていく。1997 年にパトリックはジンバブエへ旅立ってしまうが、息子のステネリー (世帯 26) とアキム (世帯 27) は父が開墾した農地を受け継いだ。ティックティックの娘であるエネレス (世帯 25) は、1991 年にロデュウェルと M 村で結婚した。2006 年に夫のロデュウェルを亡くして以来、世帯主として農作業などの労働をエネレス自身がおこなっている。ティックティックの甥のフィニアス (世帯 19) と孫であるジョージ (世帯 23) も 1989 年と 1996 年にそれぞれ M 村に移住してきた。

サムウェル・チティガ (世帯 20) は、カリバ湖畔で漁をおこなって生計を立てていたが、収入を安定させるため農業に従事したいと常々考えていた。そこで、異父兄弟のロデュウェルから M 村で広い土地が手に入ると話を聞いたので、2 人の息子 (世帯 28, 30) と一緒に 2003 年に移住してきた。2006 年のロデュウェルの死後、サムウェル・チティガは広大な土地と妻子を相続している。

### C グループ (世帯番号 33 - 41)

ネルソン (世帯 34) には M 村に親族や知人はいなかったが、農業に適した土地を探し求めるなかで M 村にたどり着き、息子 (世帯 39) と共に、1990 年に低地から移ってきた。彼が入植したのは幹線道路から 4km 以上離れている山奥であったが、周辺には誰も住んでおらず、広い土地を手に入れることができた。2003 年に甥のライフ (世帯 38) が別の丘陵地の村から、2005 年には妻の甥であるキスウェル (世帯 41) が低地の村からやってきており、いずれもネルソンから土地を譲与された。

アーノルド (世帯 35) の世帯は低地の村で農業によって生計を立てていた。農地も広く特別な不満はなかったが、より広く肥沃な土地を求めて 1994 年に M 村へ移住した。彼もまた M 村には親族や知人などの伝手は無かったものの「希望通りの土地を手に入れることができた」という。

サムソン (世帯 33) は低地の村で生まれ育ったが、高地のタバコ農園へ出稼ぎに行っている間に彼の兄弟が低地の畑を占有してしまい、サムソンは帰る場所を失ってしまった。M 村から 10km ほど北にある高地の村に入植することができたが、割り当てられた土地は痩せていたため、彼はすぐに次の居住地を探し始めた。ある日、「ホーリー・スピリット」

<sup>33</sup>が彼を M 村に導き、全く繋がりが無かったアーノルド (世帯 35) と引き合わせたという。アーノルドは開墾済みの土地をサムソンに分け与え、アーノルド自身は新しく未利用地を拓いた。2002 年、高地の土地を保有したまま<sup>34</sup>、サムソンは息子の世帯 (世帯 40) と M 村に移り住んだ。

ケニス (世帯 37) はアーノルド (世帯 35) の娘と結婚して低地の村で暮らしていた。しかし彼の土地は非常に狭かったため、妻がアーノルドに頼んで 2006 年に土地を分けてもらった。

フライデー (世帯 36) も M 村に伝手を持たずに、2003 年、低地の村からやってきており村長から土地を割り当てられた。

### 小学校教師の世帯 (世帯番号 42、43)

M 村にはドイツの NGO の援助で建てられた小学校があり、2 つの教師の世帯 (世帯 42、43) が 2003 年と 2004 年から M 村で暮らしている。

## 3.0. 自給農業

調査村で栽培されている作物 (表 2) は、トウモロコシ (*mapopwe*)、モロコシ (*maila*)、サトウモロコシ (*munsale*)、カボチャ (*matanga*)、ササゲ (*nyangu*)、オクラ (*mudelele*)、ラッカセイ (*indongwe*)、サツマイモ (*chimbwali*) などであり、11 月から 4 月の雨季の間に播種されるのが一般的である。中でもトウモロコシは全世界帯で栽培されており、作付面積のほとんどを占めている。庭畑 (*gaadeni*) では、セイヨウアブラナ (*leipu*)、トマト (*madeede*)、キャベツ (*kkabichi*)、タマネギ (*hanisi*) などの野菜が灌漑を用いて育てられている。

トウモロコシは主食の原料として最も重要であり、調査地ではほとんど毎日食されている。トウモロコシの粉 (*busu*) を練って作る固練り粥 (*inshima*: 以下「シマ」と表記)<sup>35</sup>が主食であり、副食のおかず (*cisiyu*) を付けて食べる。世帯 24<sup>36</sup>でおこなった 9 日間の食事調査では、調理をおこなった 84 回のうち、69 回がトウモロコシ粉を使ってシマやポリッジを作っており、1 日の平均使用量は 6.68kg であった。これを実質消費成員数 12.7 人<sup>37</sup>で割ると 1 人あたりの消費量は、0.53kg/日<sup>38</sup>となる。単純に年間消費量を計算すると、1 人あたり 192kg、世帯 24 全体では 2,438kg になる。このように毎日、大量に消費される主食の原料を得るため、トウモロコシ栽培は彼らの農業の中心となっている。

表2 作物ごとの栽培世帯数

	和名	方名	学名	栽培世帯数
穀類	トウモロコシ	<i>mapopwe</i>	<i>Zea mays</i>	41
	モロコシ	<i>maila</i>	<i>Sorghum bicolor</i>	10
イモ類	サツマイモ	<i>chimbwali</i>	<i>Ipomoea batatas</i>	15
	キャッサバ	<i>mwaania</i>	<i>Maniot esculenta</i>	8
マメ類	ラッカセイ	<i>indongwe</i>	<i>Arachis hypogaea</i>	17
	ササゲ	<i>nyangu</i>	<i>Vigna unguiculate</i>	13
野菜類	カボチャ	<i>matanga</i>	<i>Cucurbita</i> sp.	34
	セイヨウアブラナ	<i>leipu</i>	<i>Brassica napus</i> L.	28
	オクラ	<i>mudelele</i>	<i>Hibiscus esculentus</i>	23
	トマト	<i>madeede</i>	<i>Lycopersicon esculentus</i>	19
	ウリ	<i>makowa</i>	<i>Cucurbita</i> sp.	11
	スイカ	<i>mamunywa</i>	<i>Citrullus lanatus</i>	4
	キャベツ	<i>kkabichi</i>	<i>Brassica oleracea</i> var. <i>capitata</i>	4
	タマネギ	<i>hanisi</i>	<i>Allium cepa</i>	1
果物類	バナナ	<i>ibbanana</i>	<i>Musa</i> spp.	30
	マンゴー	<i>mango</i>	<i>Mangifera indica</i>	25
	グアバ	<i>guava</i>	<i>Psidium guyuva</i>	23
	パパイヤ	<i>ipopo</i>	<i>Carica papaya</i>	9
	不明	<i>masau</i>	<i>Ziziphus mauritiana</i>	1
その他	サトウモロコシ	<i>munsale</i>	<i>Sorghum saccharatum</i>	29
	サトウキビ	<i>njimbe</i>	<i>Saccharum officinarum</i>	5
	トウガラシ	<i>impilipili</i>	<i>Capsicum annuum</i>	4
	フウチョウソウ	<i>sungwa</i>	<i>Gynandropsis gynandra</i> (L.) Briq.	7
	棉花	<i>buluba</i>	<i>Gossypium</i> spp.	3
	タバコ	<i>tombwe</i>	<i>Nicotiana</i> spp.	2

注) 2006/2007年度の聞き取り調査、植物同定をもとに筆者作成。

### 3.1. 地形による土地の使い分け

M村では傾斜地の地形的要因によって異なった栽培方法を採用しており、複数のタイプの地形に農地が設けられている(図4)。ひとつ目は河川氾濫原の平坦地である *chifuti* であり、ふたつ目は *chifuti* の中の低湿地の *zilili* であり、そしてもうひとつは傾斜地の *mulundu* である。まずは *chifuti* と *mulundu* における雨季のトウモロコシ栽培について説明する。

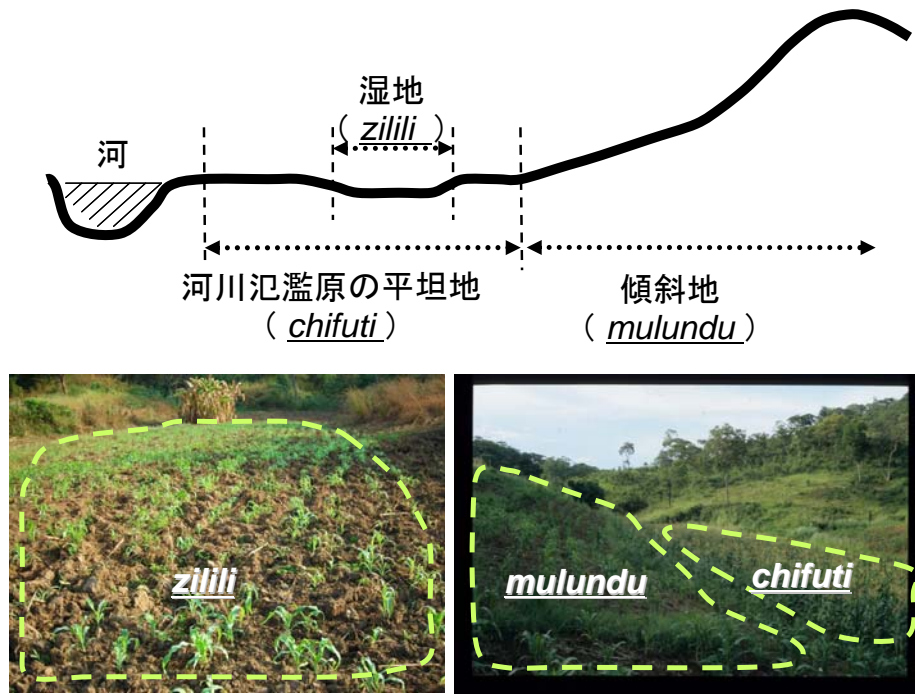


図4 傾斜地の地形的要因による土地区分

注) 聞き取り調査をもとに筆者が作成した概略図。

### 整地

雨季が訪れる直前の10月頃、耕作予定地に生えている低木や雑草などを斧や手鋤を用いて除去して整地をおこなう。乾燥した草に火を放って焼き払う場合もあり、これは耕起作付けを容易にするためにおこなわれる。

### 播種

播種を始める時期は世帯によって若干の差はあるが、ほとんどは雨季が始まる11月頃に開始する。その方法は、ウシによる犁耕と播種を同時におこなう方法と、手鋤を用いて植穴を掘り播種する方法の2つに大別できる。

犁耕は、拡大家族内の数世帯が協力しておこなう共同労働であるが、拡大家族を越えてウシや犁が貸借される場合もあり、結果として多くの世帯が犁耕をおこなうことが可能となっている<sup>39</sup>。犁耕は2頭のウシに鉄製の犁を引かせておこなわれる。犁を操るのは主に大人の男性であり、女性や子供はウシを誘導する役割を任される。男性は耕耘し続け、犁を3ライン入れる毎に女性がトウモロコシの種子を播種していく。1箇所にとす種数<sup>40</sup>が多くなるほど間隔を広く設けて密植を避ける。このときトウモロコシと一緒にカボチャ、ササゲ、サトウモロコシなどの種子も播種することもある。

手鋤を用いた播種では、深さ20cmほどに掘った植穴にトウモロコシを2、3粒入れ上か

ら土で覆う。この作業は家族総出でおこなわれるが犁耕で播種するよりも時間と手間がかかるため、この方法のみで耕作をおこなっている世帯は10月頃から植え付けを始める。彼らは「ウシや犁を持っておらず、それを借りる金銭的余裕が無いので仕方なく手鋤で植え付けをしている<sup>41)</sup>」と嘆息をもらすことが多いが、犁耕をおこなっている世帯であってもウシが立てないほどの急勾配の傾斜では手鋤で植え付けている。犁耕による場合と同様にカボチャ、ササゲ、サトウモロコシなどが混作される。

## 除草

播種を済ませた畑には、1ヶ月ほどで雑草が繁茂してくる。家族総出で手鋤を使って除草がおこなわれ、この作業は収穫まで毎日続く。畑全体の除草が済むと2度目の除草は女性に任せ、男性は他の生業活動に従事し始めることがある。

## 施肥

いくつかの世帯はPAM<sup>42)</sup>から支給された化学肥料を施肥するが、街で肥料を購入して施肥する世帯はほとんどない。庭畑での野菜栽培に家畜の糞が利用されていたが、トウモロコシ栽培には用いられていない。

## 害獣の監視

M村周辺にはヒヒが生息しており、乾燥する前の柔らかいトウモロコシを狙って畑に出没する。村人たちは早朝から日暮れまでヒヒを見張りながら農作業をおこなうが、ヒヒは僅かな隙を見計らって作物を盗む。トウモロコシが乾燥する雨季終盤の3月頃まで見張りが続く。

さらに、村人が飼育しているウシ、ヤギ、ブタなどの家畜もあらゆる農作物から遠ざける必要がある。M村には低地で見られるような畑全体を取り囲む柵は設けられていないため、牧童の家畜の統制には限界があり、何度も作物が襲われていた。被害が酷いときは賠償問題にまで発展することがあり、最も深刻な事例では90kgのトウモロコシ3袋<sup>43)</sup>が支払われていた。

## 収穫

通常はトウモロコシの乾燥を待って収穫作業を開始するが、乾燥前の瑞々しい生トウモロコシを下ろし金<sup>44)</sup> (*chikelele*) で下ろしてシマの材料にすることがある。このシマは乾燥トウモロコシのものとは比べて味が良いとされているが、生トウモロコシを下ろす際に芯に可食部が残ってしまうので、乾燥トウモロコシを調理した場合と比べると損失が大きい<sup>45)</sup>。そのため、人々は生トウモロコシをできるだけ収穫せずに乾燥するのを待つ。

トウモロコシが結実してから1, 2ヶ月ほど経ち、葉と茎が乾燥して緑から茶に変色すると収穫が始まる。子供も含めて全員で作業をおこない、1ヶ月以内に畑から家まで運び終え

てしまう。家の敷地内でさらに乾燥させた後、脱粒せずに穀倉に貯蔵するが、収穫量が少ない世帯では貯蔵する前に消費し切ってしまうこともある。

以上が *chifuti* と *mulundu* でのトウモロコシ栽培である。*chifuti* と *mulundu* の違いとして、平坦な *chifuti* の方が *mulundu* よりも農作業をおこないやすく、作物の生育が良いと村人は語る。雨季の始まりと同時に *chifuti* が耕され、まとまった雨が降り出したことを確認した後に *mulundu* の耕作に取り掛かるという耕作順位を採用する世帯が多い。これは、*chifuti* が水分を溜め込みやすく、少ない降雨であっても作物の生育が可能であるという特性を利用した方法である。しかし *chifuti* は河川に近く、大雨によって浸水したり氾濫した水に作物が流されたりしやすいため、高台の *mulundu* 耕作と組み合わせて収穫を確保している。

*zilili* においても整地から収穫までの農作業はほとんど変わらない。それでは *zilili* の特徴はどこにあるのだろうか。

最も顕著な点として、*zilili* では湿潤な土壌という特性を生かして、年に2回トウモロコシを作付けできるということが挙げられる。雨季の作付けでは *chifuti* や *mulundu* よりも1ヶ月早く播種することができるため、1月に収穫することが可能である。乾季の作付けにおいては5月に播種し、9月に収穫できる。施肥せずともトウモロコシの生育が良く、*chifuti* や *mulundu* よりも密植されている<sup>46</sup>。つまり *chifuti* や *mulundu* と比べて *zilili* は湿潤、肥沃であり、M村においてもっとも有用な土地と考えられる。しかしながらM村にある *zilili* は幹線道路沿いの一箇所のみであるといわれ、誰でも利用できるというものではない。

土地の種類ごとの利用世帯数を A, B, C のグループで比較してみると、A, B, C のほとんどの世帯で *mulundu* と *chifuti* は利用されているが、*zilili* は A グループの11世帯のみが占有している(表3)。これは、M村に最初に入植したデビッドが *zilili* を開墾・保有し、彼の死後は親族が相続したからである<sup>47</sup>。

表3 地形タイプごとの畑の保有状況

	A: 15世帯	B: 17世帯	C: 9世帯
<i>chifuti</i>	9	12	6
<i>mulundu</i>	14	17	9
<i>zilili</i>	11	0	0

注) 2006/2007年度の聞き取り調査をもとに筆者作成。

### 3.2. トウモロコシの自給

図5は2005/2006年度のトウモロコシの備蓄が切れてから、2006/2007年度の収穫物を消費し始めるまでの期間とそれぞれの世帯数の関係をA, B, Cのグループごとに示したものである。備蓄の欠乏期間が1ヶ月未満の世帯は全体のわずか4分の1ほどであり、なかでもAグループの欠乏期間の長さは際立っている。農業優良地である *zili* を保有するAグループのトウモロコシの備蓄が少ない理由の考察は後述するが、総じて、M村のほとんどの世帯は主食であるトウモロコシを購入していることになる。

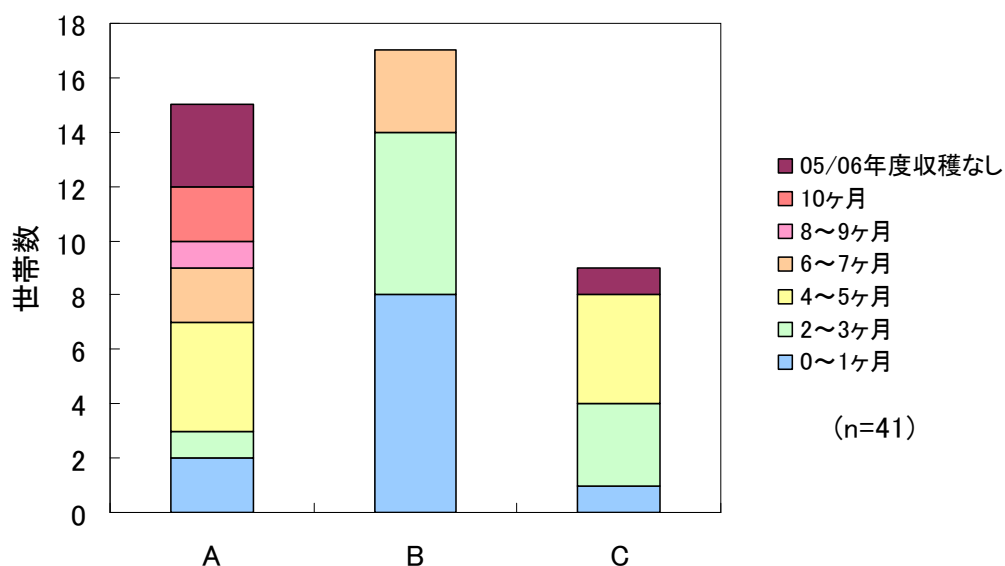


図5 トウモロコシの備蓄が欠乏する期間\*

注1) 2006/2007年度の聞き取り調査をもとに筆者作成。

注2) \*2005/2006年度の収穫物の備蓄が切れてから2006/2007年度の収穫物を消費し始めるまでの期間を指す。

#### 4.0. 木挽き業

木挽き業とは斧で樹木を伐採し、大ノコ<sup>48</sup>で挽いて製材した板を売る生業である。2007年のM村における木挽き業従事者は18人であり、ほとんどが1990年代以降<sup>49</sup>に木挽き業を始めている。

板の販売先は主に3つあり、ひとつは近隣の町に住む家具職人であり、もうひとつはカリバ湖で漁業を営む団体、そして3つ目はカペンタ漁の会社である。漁業団体とカペンタ漁の会社では、漁をおこなうためのボートの材料として板が用いられる。調査期間中に買い取られた板の枚数と金額を業者別に見てみると、家具職人が140枚（K1,602,200）、漁業団体が51枚（K770,000）、カペンタ漁会社が324枚（K4,298,000）と、カペンタ漁会社がもっとも大きなウェイトを占めていることがわかる。近年ではザンビアの銅景気に後押しされ、カペンタ漁会社はボート<sup>50</sup>を増産しており板の需要は高まっている（図6）。



図6 カペンタ漁のボート

注) 筆者撮影。

板の需要のみならず、調査村には豊富な森林資源や搬出に必要な幹線道路など、木挽き業が発展する条件が十分に揃っている。次からは、M村でおこなわれる木挽き業の作業や経済性について、従事世帯間の関係に着目しつつ述べていく。

#### 4.1. 作業工程とユニット

基本的に木を伐採する場所の規制は無いので、M村の木挽き業従事者たちはM村内であればこの木を切っても問題はない。他村の場合には、その村の村長の許可が必要となるが



「了解を取っておく」程度のものであるので、伐採を断られることは無いと考えてよい。つまり、村内、村外に限らず自由に伐採することができるが<sup>51</sup>、効率良く板を切り出すためにできるだけ幹線道路に近い場所から大きな木を切ろうとするので、「近年は山奥でなければ大径木を見つけることができない<sup>52</sup>」と従事者たちは語る。

畑の除草がひと段落する 2 月になると、木挽き業に従事する男性たちが斧と大ノコを持って山に入っていく。伐採の対象となる樹種は決まっておき（表 4）、太く真っすぐなものが選ばれる。

表 4 伐採対象樹種

方名	科	亜科	学名
<i>mukwa</i>	Fabaceae	Faboideae	<i>Pterocarpus angolensis</i>
<i>mukamba</i>	Fabaceae	Caesalpinioideae	<i>Azelia quanzensis</i>
<i>mububa</i>	Fabaceae	Mimosoideae	<i>Albizia versicolor</i>
<i>munpingili</i>	Fabaceae	Mimosoideae	<i>Albizia antunesiana</i>
<i>munsinbiti</i>	Myrtaceae		<i>Syzygium cordatum</i>

注) 2006/2007 年度の聞き取り調査と植物同定をもとに筆者作成。

選定した対象木の伐採は以下の工程でおこなわれる。

- ① 斧で切り倒す。
- ② 周辺の樹木を用いて土台を作る。
- ③ 切り倒した丸太を土台の上に載せる。
- ④ 最大の歩留まりが得られるように墨入れ<sup>53</sup>をおこない、大ノコで木取りして材に分ける。
- ⑤ 切り分ける板のサイズ<sup>54</sup>に合わせて材に墨入れをおこなう。
- ⑥ 直線に沿って材を大ノコで挽いていく。このとき土台と材の間に挟んでおいた木片を微妙に調整しながら、板が曲がらないように製材する。
- ⑦ 製材した板をトラックで搬送できる場所まで運び出す<sup>55</sup>。

製材をするときは大ノコを 2 人で挽く（図 7）ため、従事者たちは 2 人もしくは 3 人でチームを組んでこれらの工程をこなしていた。本稿ではこの組合せを「ユニット」と呼ぶ。2007 年の M 村の「木挽き業従事者とユニットの関係」と「大ノコの所有者」を図 8 に示した。3 本の大ノコは個人が持っており、残りの 2 本は数人の兄弟が共同で所有している。M 村における木挽き業従事者は合計で 18 人であり、A グループに 10 人、B グループに 7 人、C グループに 1 人となっている。ユニットは A, B, C のグループを超えて組まれる場合も多く、これらのメンバー間の関係を示すために 2 つのユニットを取り上げて説明する。



図7 木挽きの作業

注) 筆者撮影。

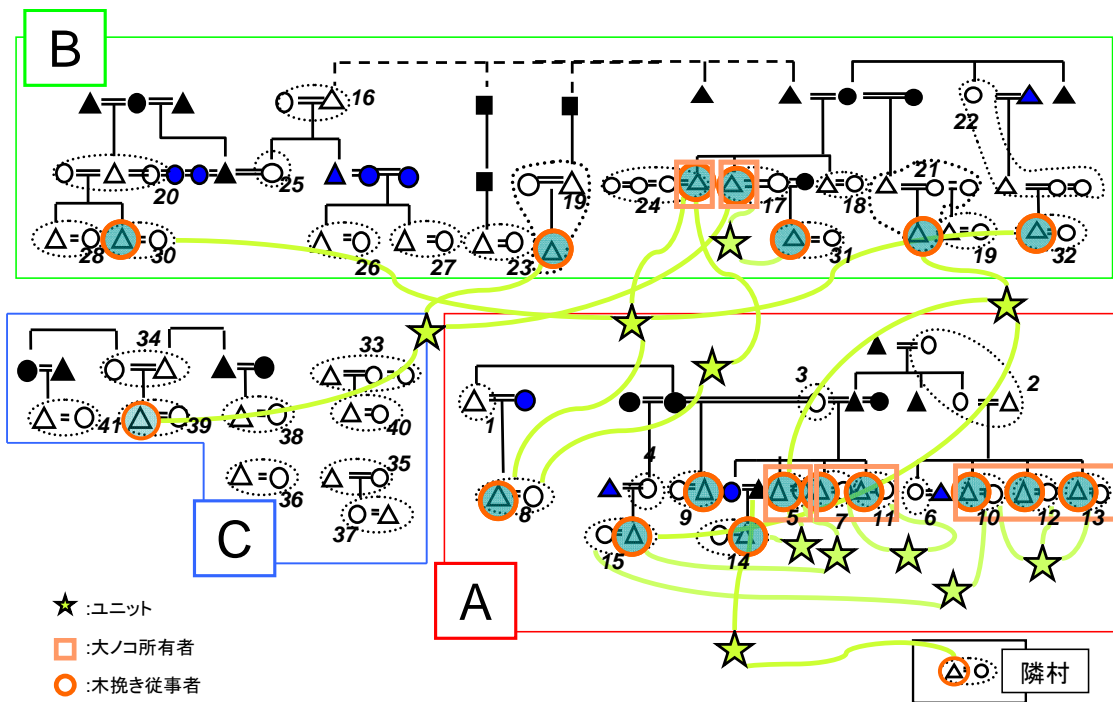


図8 大ノコの所有者と木挽き業従事者のユニット関係図

注1) 2007年1~6月の聞き取り調査をもとに筆者作成。

注2) 世帯番号はイタリック体の数字で表記した。

### ユニット例 1

クリフォード（世帯 15）から見て、母の兄弟であるボヌウェル（世帯 5）は母方叔父（アジシャ：*azisha*）であり、母系社会のトンガでは重要な役割を持つ<sup>56</sup>。クリフォードは、大ノコ所有者であるボヌウェルとユニットを組むことができ、2005年から木挽き業を始めた。

同年、クリフォードはジャイロス<sup>57</sup>（世帯 21）の妹と結婚した。これによってクリフォードとジャイロスは義兄弟（*mulamu*）<sup>58</sup>となる。ジャイロスはこうした関係を持って、2007年にクリフォードとボヌウェルのユニットに参入した。

### ユニット例 2

ディクソン（世帯 8）、ディック（世帯 30）、クリス（世帯 32）の3人は、大ノコ所有者であるロバート（世帯 24）に板 30 枚を借料として支払って大ノコを借り、木挽きをおこなっていた。このユニットは 109 枚の板を切り出し大きな利益を上げていた。彼らの場合、大ノコの所有者に「支払い」をして木挽き業に従事していると考えられる。

木挽き業に携わるには大ノコの所有者との親族関係が重要となり、通婚によって生み出される新たな繋がりを手繰って参入するという事例も確認できる。また、大ノコ所有者に「借料」を支払って参入するという方法も見られ、親族関係内に限定されないユニットが生まれる可能性もある。これら以外には、親子や兄弟同士で形成するユニットを挙げることはできない。

ほとんどの場合、板の売上はユニットの成員内で均等に「山分け」される<sup>59</sup>。次では木挽き業の経済性について述べる。

## 4.2. 木挽き業の経済性

木挽き業の従事者たちは、板の注文を受けてから作業に取り掛かることもあれば、あらかじめ貯め込んでおいた板をまとめて売り払うこともある。買い手との契約を取り付ける方法は様々であり、家具職人などを直接訪ねて交渉したり、知人からの紹介で需要が無い込んだりもする。最近では携帯電話<sup>60</sup>を使ってカリバ湖畔のカペンタ漁会社に売り込む例も珍しくない。契約後、買い手は村までトラックで乗りつけ、従事者から板を買い取っていく。中でもカペンタ漁会社は板を大量に買い付ける場合が多く、その場に居合わせた者も契約者に便乗して在庫の板を販売することができる。板をトラックに積み込む際、誰が売った板なのか判別できるように目印を付け、数日後、従事者たちは湖畔の会社に出向いて板を測定し、売上金を受け取る。

業種ごとに板を買い取る価格が異なっており、高い順にカペンタ漁会社（K1,900 -

2,000/foot<sup>61</sup>)、漁業団体 (K1,500/foot)、家具職人 (K1,300/foot) となっている。従事者たちは、カペンタ漁会社に買い取ってもらうのが理想であると考えているが、常にその機会があるとは限らないので、他の買い手にも積極的に販売している。

2007年の6ヶ月間で、M村内の木挽き業従事者たちの売上の合計金額はK7,036,200(約20万円)であり、一人あたりの平均はK390,900(約1,100円)になる。K390,900をトウモロコシに換算すると約800キログラム<sup>62</sup>に相当し、木挽き業から得られる現金収入は非常に大きいと考えられる。売上の合計金額の内訳をA, B, Cのグループごとに見てみると、AグループがK4,481,200(64%)、BグループがK2,087,000(30%)、CグループがK468,000(7%)となっており、Aグループの割合が特に目立つ。

板の販売から得た現金の用途を表5に示した。回答を得られた11人中7人の世帯でトウモロコシやミリミルが購入されており、その量はそれぞれの世帯での100日前後の消費量に相当する<sup>63</sup>。ブタ、ヤギなどの家畜にも投資され、板の売上金が従事者の世帯の生計を支えているといえる。その他、携帯電話やカメラといった高級品や服飾品なども購入され、大きな収入が彼らの生活を「豊か」にしているといえる。だが木挽き業は、従事者の世帯のみならず、木挽き業に参入していない世帯の家計にも大きく寄与している。

表5 木挽き業から得た現金収入の用途

世帯番号	粗収入(K)	購入物
8	765,000	トウモロコシ 130kg トウモロコシ粉 50kg ブタ1頭 服飾 毛布 借金返済
15	732,500	トウモロコシ 100kg 食料 トタン屋根4枚 貯金 婚資の支払い
11	565,000	食料 兄弟の治療費 服飾 カメラ
39	468,000	トウモロコシ 180kg ヤギ1頭 ニワトリ4羽 毛布 服飾 貸与
5	432,600	トウモロコシ 150kg 日用品 服飾
32	418,000	トウモロコシ 150kg 皿 服飾
29	373,000	トウモロコシ 270kg 子供の病院代
24	350,000	携帯電話
12	264,000	トウモロコシ 180kg 日用品 携帯電話
28	240,000	サツマイモ 毛布 服飾 ラジオ
19	215,000	ブタ2頭 ニワトリ3羽 服飾

注1) 2007年1~6月の聞き取り調査をもとに筆者作成。

注2) M村の木挽き業従事者18人中11人が回答。

2章で述べたように、調査地には除草やレンガ造りなどといった様々な賃労働の機会がある。調査期間中のM村成員の間でおこなわれた賃労働において、雇った側(雇用主)と雇

われた側（賃労働者）の世帯、賃金について詳しく見てみると、雇用主には木挽き業従事者の世帯が多く、支払われた賃金の85%は彼らからの支出であった。反対に、賃労働者には木挽き業に参入していない世帯が多く、賃金の78%を受け取っていた（図9）。このことは、木挽き業で得られた現金が、賃労働を通して木挽き業に従事していない世帯へと流れていることを示している。

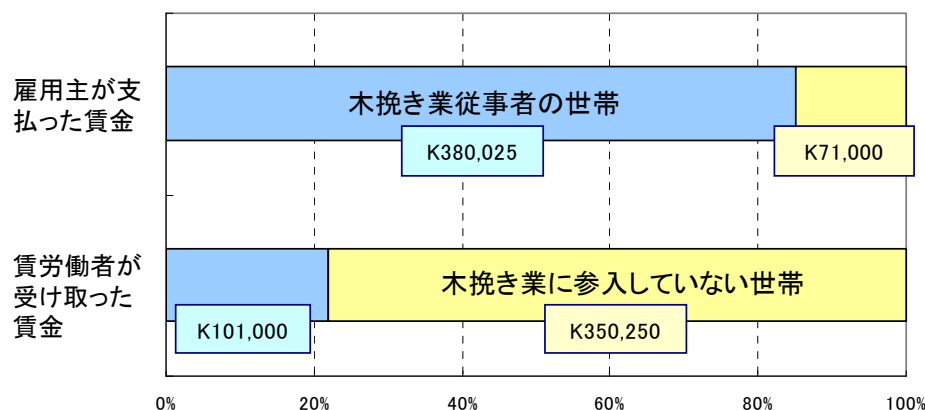


図9 M村内の賃労働の支払い

注) 2006/2007年度の聞き取り調査をもとに筆者作成。

以上、木挽き業の作業と経済性について述べたが、2007年4月から始まった板の仲買活動は、これまでの丘陵地の生業に大きな変化をもたらす可能性を孕んでいる。

### 4.3. 板の仲買

E.M.は、兄(M.M.)が村長を務める隣村で暮らしており、道路沿いの商店を経営していた。ほとんどの客はM村周辺の住民であり、たまっていく一方の「つけ」にE.M.は頭を抱えていた。2006年11月、兄のM.M.も隣接して同じような商店を建てたが、経営状態は弟の店と変わりなかった。

2007年4月、E.M.は「つけ」のシステムを改め、板を「つけ」にして商品を購入できるようにした。お金の「つけ」と同様に、客は商品をお店で持ち帰ることができ、後日板を持ってきて「支払い」を済ませればよかった。村人の購買意欲を掻き立てようと、E.M.はラジオ、携帯電話、ソーラーパネル、バッテリー、服飾品などをルサカで大量に購入してきた村の店に陳列した。この方法は当たりし、人々は商店に押しかけそれまで買うことがなかったような高級な商品を板の「つけ」で次々と購入していった。E.M.にとって特に成功したのは板の「つけ」がほとんど滞らなかったことであった。新しいアイデアを次々と採

り入れ<sup>64</sup>、商店の裏には板が積み上げられていった。集められた板は全てカペンタ漁会社に売られ、E.M.ひとりの売上はK5,954,000（約17万円）<sup>65</sup>に達した。兄のM.M.も同じやり方で板を転売したが、売上は弟の3分の1以下程の金額であった。

M村の木挽き業従事者たちも「つけ」で商品を購入するなどして、E.M.に225枚の板を支払った。その勢いは著者が帰国するまで衰えることはなく、4月からの2ヶ月間、彼らがカペンタ漁会社などの買い手に板を直接販売する光景はほとんど見られなくなった。

## 5.0. まとめと結論

まずは、調査地の生業についてまとめる。M村では、全世帯でトウモロコシが栽培されており、地形によって異なる3種類の畑で作付けがなされ、村人たちはそれぞれの特性を生かした農業をおこなっていた。しかし、ほとんどの世帯でトウモロコシの収穫量は自給水準に達しておらず、村人たちは様々な方法で現金を得てトウモロコシを購入していた。

それらの中でも木挽き業は、村の多くの世帯が従事しており収入の大きい生業である。M村で木挽き業が発展した背景には、豊富な樹木資源、村を通る幹線道路、カペンタ漁の拡大による木材需要の拡大など、調査地の地理的条件や近年の経済環境の変化が深く関係している。木挽きの作業をおこなうには2,3人でユニットを組む必要があり、メンバーの組み合わせにはトンガの「伝統的」な社会構造と「経済的」な繋がりが影響していた。板の売上は従事者世帯のみならず、他の世帯の生計にも寄与しており、木挽き業は地域全体の経済にとって欠かせないものとなっている。

M村全体の生業は以上のように概括できる。世帯ごとの生業活動は一見すると「まちなち」であるように見受けられるが、2章で述べた親族関係と移住の経緯を「下敷き」にすると、それぞれの関連性が浮き出てくる。

### Aグループ（世帯番号1-15）

Aグループの多くの世帯はM村でもっとも有用な土地とされる *zili* を保有し、雨季と乾季の2回にわたってトウモロコシを栽培している。（本稿中では詳述しなかったが）トウモロコシ栽培以外の *zili* の利点として、換金作物である野菜や果物がよく育つということを指摘できる。特にバナナは手間をかけずとも1年中実をつけるので、恒常的な現金収入源になる。しかしながら、1世帯あたりの *zili* の耕作面積は小さく、*chifuti* や *mulundu* でもトウモロコシを耕作しているが、その収穫量は少なく備蓄は早い時期に無くなってしまふ。

彼らの居住地は幹線道路に近い（図10）、いくつかの現金稼得活動に参入する機会に恵まれている。例えば、女性たちが従事する石版、石炭、萱の販売は、道路脇で乗用車やトラックのドライバーを相手におこなわれ、居住地が幹線道路に近いことがこれらの生業をおこなう上で欠かせない条件となる。また、大ノコを所有している世帯が多く、Aグループの

男性は木挽き業に参入しやすいといえる。

総じて、A グループの世帯はトウモロコシの自給率は低いものの、男女ともに安定した現金稼得手段を有している。

### **B グループ (世帯番号 16- 32)**

早くから M 村に入植したことにより、多く世帯が広い農地 (*chifuti*) を保有し、トウモロコシの自給率が高い。乾季には *chifuti* の季節河川沿いで野菜を育て、市場での販売もおこなっている。M 村の中でワタ栽培を成功させているのは B グループの 3 世帯 (世帯 23, 26, 27) のみであり<sup>66</sup>、高い収益を得ている。

一部の世帯は幹線道路沿いに住んでおり、A グループと同様に女性たちが石版などを販売している。2 世帯が大ノコを所有しているため、木挽き業に従事する男性が多い。

### **C グループ (世帯番号 33- 41)**

A, B グループの世帯によって幹線道路から近い土地はすでに占有されていたので、多くの世帯が山奥に農地を拓いた。主にトウモロコシを栽培しているが、野菜や果物などの換金作物を育てている世帯は少ない。

彼らにとって重要な現金収入源は賃労働であり、A, B グループの世帯が雇用主となる場合が多い。

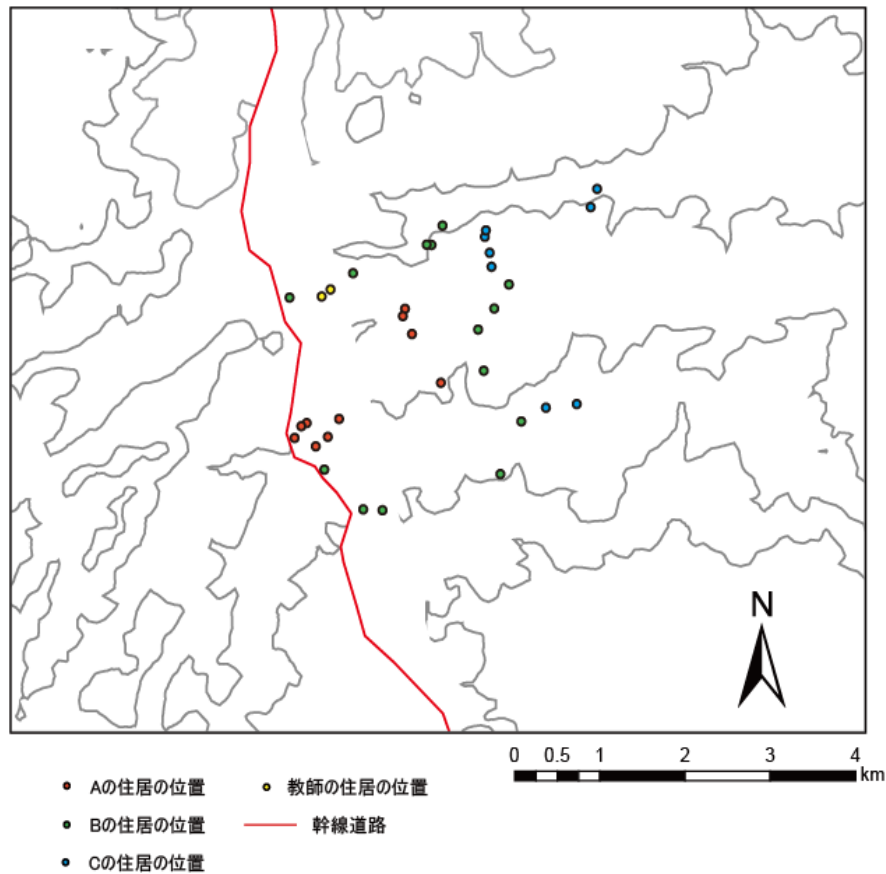


図10 A, B, Cの住居の位置

注1) 等高線はDigital Elevation Modelをもとに作成した。  
 注2) いくつかの世帯は同じ場所に居住地を設けているため、  
 地図上に示されている住居のポイントの数は全世帯数  
 (43)よりも少ない。

移住村の土地保有の状況を決定付けるのは「草分け (pioneer)」〔Cliggett 他 2006〕の存在であり、彼が最初に利用した土地資源が親族によって継承されていくことは、トンガの慣習法によって保証されている〔Colson 1960〕。M村の「草分け」との繋がりを持つ世帯は、好条件の土地を確保することが可能であり、農業優良地の活用だけでなく様々な現金稼得の活動に参入しやすいなど、有利に生業を展開してきたと考えられる。その一方で、親族や知人を持たずにM村に移住してきた世帯が村人や村長から広い土地を分け与えられたり、木挽き業のユニットにおいてグループを超えた関係が創出されたりするなど、土地の入手や現金稼得手手段へのアクセスに関して親族内で限定されているわけではない。

ダム開発の名分のもと強制的に居住地を奪われたトンガの人々は、農業に不向きな低地に



において、不安定な天候、経済、政治という不測の外因の中を生き抜くため、自家消費分の食糧確保を軸とし、一過性のブームを捉えながら多様な生業を発展させてきた〔Cliggett 他 2006〕。しかし、膨らみ続けた人口は土地不足を蔓延化させ、多くの世帯が低地から高地や大都市へ移住していった。

M村の人々は、不利な土地<sup>67</sup>を居住地として選ぶことで土地不足の渦中から抜け出し、森林が残る丘陵地という地域の資源を最大限利用してこの地で生き抜く戦略を磨いてきたといえる。木挽き業が調査村の重要な産業であることは本稿で明らかにしたが、板の仲買の隆盛は森林資源の減少を加速させ、木挽き業を急速に先細らせかねない。木挽き業の衰退は村全体の生業や人の移動にも影響を及ぼすことも考えられ、低地を含めたトンガの人々の「これまで」と「これから」の営為を包括的に理解するため、丘陵地での継続的な調査が望まれる。

- 
- 1 カリバ湖畔で漁業を集約的に起こすため、ザンビア政府によって1995年にフィッシング・キャンプ (fishing camp) が設けられた。1998年には16あったフィッシング・キャンプが2007年には27にまで増加した。フィッシング・キャンプに暮らす住民のほとんどが南部州以外から出稼ぎにやってきた人々で構成されており、彼らはあまり農業をおこなっていない。
  - 2 ニシン科 (Clupeidae) の淡水イワシのことで体長は約3センチである〔遊磨正秀 1993〕。
  - 3 2005年の時点で17会社中15社が白人経営によるものであった。
  - 4 カペンタ漁には大掛かりなボートやネットなどが必要なため、地域住民が経営を始めることは難しい。
  - 5 1,172トン (1977年) →17,034トン (1997年)〔IMERCSA 2007〕
  - 6 1960年代半ばから1980年のジンバブエ独立まで続いた白人政権と解放勢力間の内戦を指す。1970年代半ばから1980年までの間、ザンビア南部州のカリバ湖周辺とザンベジ川沿岸ではローデシア軍の攻撃によって多数の一般住民が犠牲になったと報告されている〔Scudder 1985〕。
  - 7 この一帯はチカンタ (Chikanta) の名で知られており、ピリリ・スプリング環境保護指定地域 (Bbilili Spring buffer zone) からカフエ国立公園 (Kafue National Park) に広がる地域を指す。
  - 8 ザンビアでは北から南下するにつれて年間の降水量が減少していく。北部では1,050 - 1,520mm、南部では635 - 1,015mmとなっており、最も降雨量が少ないのはザンベジ川中流域とされている〔Davies 1971〕。
  - 9 ①世帯数と②1世帯あたりの利用可能な土地面積 (ha) を見てみると、高地では①49,600、②35、低地は①13,300、②60であるのに対して、丘陵地では①3,300、②258となっている〔FAO 1993〕。
  - 10 本稿では村名の頭文字をとって、調査村をM村と表記する。
  - 11 食事調査をおこなった期間は、家族総出で早朝から農作業をおこなう農繁期にあたるため農閑期と比べて食事の回数は減少する傾向にある。
  - 12 これは、ザンビア政府が10年毎 (1969, 1980, 1990, 2000) におこなっている国勢調査 (National Census) における「世帯」の単位とも合致する定義である。
  - 13 1966 - 68年に敷設。
  - 14 トンガ族は母系的に承継される共通のクラン (*mukowa*) を持ち、同一のクランの成員同士は相互に通婚が許されていない。また、女性が婚姻後に夫のもとで生活する、父方居住制 (patrilocal) を採っているため、老齢の男子が多数の既婚の息子たちと同居する父系大家族が、村落集団の基本的単位を構成することがある〔Colson 1960〕。近年では、相続などの (社会的のみならず経済的な) 場面で母系よりも、父系よりの制度へと移行していることが指摘されている〔Price 1995〕。
  - 15 小学校教師1名 (西部州出身・民族ロジ) を除く。
  - 16 後日支払いをするという信用の下、その場で支払いをせずに商品を購入することができる。しかし支払いの期日が延びることや、不払いになることも多い。

- 
- 17 混乱を避けるため、M村の村人以外の人名にはイニシャルを表記した。
- 18 調査地には雨季と乾季で水量が大きく異なる季節河川が多く存在しており、村人たちはその河川沿いに柵で囲った畑を設けて野菜などを栽培している。
- 19 灰汁抜きのために、灰を混ぜて調理される。
- 20 根は、チブガントウ (*chibwantu*) という伝統発酵飲料 (主原料トウモロコシ) の原材料のひとつになる。「ザンビア人でチブガントウを嫌いな人はいない」といわれるほど、人々に親しまれている。
- 21 炭鉱の坑道を支えるための梁や柱として用いられており、中国人が炭鉱を経営している。
- 22 例えば、1ラインを除草するのに K1,000、犁耕の労働は 1 *rima* あたり K20,000 の賃金が支払われていた (*rima* とはトンガ語で畑の広さを表すときに用いる単位であり、1 *rima* はおよそ 1 日に犁耕できる面積とされ、1 *rima* = 1/4ha である)。
- 23 グループの A, B, C 順を最優先に、次に世帯主の年齢順を優先させて世帯番号を付与した。
- 24 2000 年代に M 村にやってきた小学校教師の 2 世帯は、本研究の分析対象としていない。
- 25 同地域は 1991 年から 1997 年までは「F 村 B」と呼ばれ、1997 年から M 村と村名を変えた。本稿では混乱を避けるため、(特別な断りが無い限り) 時代ごとの呼称を区別せずに「M 村」と表記する。
- 26 世帯主は夫のクウィニシである。
- 27 ジャネットは土地の分配などを決定する権利を有しており、デビッドの遺族たちを扶養してはいない。
- 28 トンガでは父方の兄弟と従兄弟が故人の妻や子供の後見人になる場合が多く、妻たちは後見人と再婚するというかたちを採る。
- 29 マセエは 90 歳以上の高齢のため農作業をおこなっていない。
- 30 トンガの人々は母系的に継承される共通のクラン (*mukowa*) を持つ。お互いの関係を辿ることが不可能な場合でも、同じクランを持つ者同士はお互いを親と子、兄と弟、叔父と甥などと呼び合い、親しい関係を築くことも少なくない。
- 31 M エリア 7 村において、新村の村長を前村の村長と同一のクランから選出するという方法を採用したのは M 村のみであり、他は選挙 (4 件)、居住暦の長さ (1 件)、不明 (1 件) となっており規則がある訳ではない。
- 32 諸説あるが、丘陵地に暮らす人が「丘陵地には肥沃な土地が広がっていて、トウモロコシの収穫量がすごいんだ」と低地の人に自慢したところ、「そんなはずはない、あそこは不毛の土地だ。酔っ払いの戯れ言に過ぎない」という皮肉を込めて、低地の人が調査村周辺を「M」と呼称したのが始まりだといわれている。
- 33 夢の中で、「M 村に行けば良い土地が手に入る」とホーリー・スピリットがサムソンに告げたため、それを信じて M 村を訪れたという。
- 34 サムソンは高地の村でバナナを大量に栽培していた。現在でも度々高地の村に出向いて収穫したバナナを販売するなどし、現金を得ている。
- 35 シマは、M 村ではほとんどの場合トウモロコシを用いたものであるが、低地にはモロコシの方が一般的である地域も存在する [淡路 2006]。
- 36 食事調査期間中の家族構成 (括弧内は年齢) は 20 歳以上の成人男性 2 人 (40、27)、20 歳以上の成人女性 3 人 (36、33、27)、男児 4 人 (14、7、4、1)、女児 10 人 (17、13、12、9、9、7、6、3、3、2) であった。
- 37 リチャーズらが実施した栄養調査 [Richards & Widdowson 1937] に従って、14 歳以上の男には 1.0、14 歳以上の女には 0.8、6 歳から 14 歳の子供には 0.7、それ以下の子供には 0.4 を与えて、乳児は除いて実質消費成員数を算出した。
- 38 雨季に算出されたので、乾季はこの値よりも若干大きくなると考えられる。
- 39 M 村では、犁耕をおこなうのに必要な 2 頭以上のウシと犁を所有している世帯は 9 世帯のみであるが、拡大家族内での共同労働や世帯間での貸し借りが頻繁におこなわれた結果、2006/2007 年度は 38 世帯が犁耕をおこなっていた。
- 40 昨年の作物の生育状況などから判断して種数を調整しており、1 箇所に 1 から 4 粒を播種する。
- 41 傾斜地においては、犁による「耕起栽培」よりも手鋤による「無耕起栽培」の方が土壌の流出が少なく、長期間にわたって高い収量を得ることができるといわれている [Ruthenberg 1980]。著者の印象でも、手鋤のみで耕作をおこなっている世帯の畑では、青々と元気で背の高いトウモロコシ

---

が育っており収量も多く感じられた。

- 42 PAM (Programme Against Malnutrition) は、ザンビア農業省が支援する NGO の小規模農家に対する支援プロジェクトであり、M 村は 2001/2002 年度から援助対象地域に含まれている。
- 43 K180,000 に相当する。
- 44 鉄板に穴を開けて作ったもの。
- 45 計量した結果、生トウモロコシは摩り下ろす前後で重量が半分以下 (63%減少) になるのに対して、乾燥トウモロコシは脱粒前後で変化 (15%減少) が小さい。
- 46 1ヶ所に播種される平均種数は、*chifuti·mulundu* では 2 粒に対して *zilibi* は 3 粒であった (M 村の *chifuti·mulundu* 66 筆、*zilibi* 11 筆の耕作地のデータから算出しており、ライン幅と播種間隔を揃えて計算した)。
- 47 相続の際に細分化されたために 1 筆あたりの面積は小さい。
- 48 ルサカなどの都市で約 K150,000 で売られており、高級品である。
- 49 1986 年に 1 人が始めており、以後 1990 年代に 7 人、2000 年以降が 8 人となっている (2 人無回答)。
- 50 一艘あたり 70 枚ほどの板が必要である。
- 51 調査期間中、M 村内で木挽きがおこなわれたのが 13 回、他村では 20 回であった。
- 52 伐採対象の樹木が家から遠く離れた場所であれば、山中でキャンプをしながら作業をおこなうこともある。
- 53 使用済みの中国製の乾電池 (Tiger Battery) を分解し、中のペースト状の黒い液体に糸を浸す。黒く染まった糸を材の両端から引っ張ったまま指で弾くことによって、まっすぐな直線が引かれる。
- 54 家具職人などから特別に注文されない限り、幅 1foot、長さ 10feet、高さ 1inch の大きさに切り分けられる。
- 55 板の搬送は一家総出でおこなわれるが、いくつかの事例では 1 枚あたり K1,000 - 1,500 の賃金で人が雇われていた。
- 56 トンガにおける母方叔父の役割は地域や時代によって異なっており、詳細は先行研究 [Colson 1960 など] に明るい。
- 57 世帯主は村長のジン (G.S.) であるが、息子のジャイロスはまだ結婚しておらず世帯 21 に含まれる。
- 58 トンガでは義兄弟同士はムラム (*mulamu*) と呼び合い、親密な関係にあるとされる。
- 59 誰かが早急にお金を必要にするときなど他のメンバーが手助けすることがある。後日、「助けられた」人は「助けてくれた」人の仕事を手伝うことになるが、手助けの回数や金額などを厳密に勘定して返済するのではなく「緩やかに」助け合っている。詳細は中村 [2007] を参照。
- 60 M 村住民の中で 7 人が携帯電話を所持しており、3 人が教師、4 人が木挽き業従事者たちである。
- 61 1foot は 30.48cm である。
- 62 3 章で算出した 1 人あたりの消費量 (192kg/年) で単純に計算すると、4 人家族の世帯が 1 年間暮らしていくのに十分な量である。
- 63 3 章で算出した 1 人あたりのトウモロコシ消費量 (0.53kg/日) と、実質消費員数を使ってそれぞれの世帯について概算したところ、世帯 7 で 94 日、世帯 28 で 105 日、世帯 12 で 94 日、世帯 3 で 98 日、世帯 19 で 94 日、世帯 17 で 159 日の消費量となった。
- 64 E.M. はルサカで大ノコを購入し、大ノコを持たない若者たちに貸し出したり、(カペンタ漁会社が買い取る金額の半額の) K1,000/foot で板を直接買い取ったりした。
- 65 2007 年 6 月 30 日時点の売上。正確な計上利益を算出することはできないが、E.M. は「売上の半分は利益 (profit)」であるという。
- 66 これらの 3 世帯は 2004/2005、2005/2006、2006/2007 年度といずれも高い収量と売り上げを記録しており、M 村の他の世帯は全てワタ栽培に失敗している (詳細は [中村 2007])。
- 67 千葉 [1993] によると、山地斜面の生活は「疲労度が大きい上に、斜面土壌の匍行 (Creeping) もしくは流出の結果、土壌がうすくなって植物の生育に影響する」ため「山地は人類の活動に不利である」と考えられる。

### 参考文献

- Central Statistical Office (2004) Southern Province Volume Eight: Analytical Report. *2000 Census of Population and Housing*. Lusaka: Central Statistical Office.
- Colson, E. (1960) *Social Organization of the Gwembe Tonga*. The Rhodes-Livingstone Institute: University of Manchester Press.
- Cliggett, L. & Colson, E. & Hay, R. & Scudder, T. & Unruh, J. (2006) Chronic Uncertainty and Momentary Opportunity: A half century of adaptation among Zambia's Gwembe Tonga. *Human Ecology*, 35: 19-31
- Food and Agriculture Organization of the United Nations (1993) Zambia Southern Province Food Security Project, *Soicio-Economic and Production Systems Study*, 137, 93.: Investment Centre FAO / IFAD Cooperative Programme
- Jaspan, M. A. (1953) *The Ila-Tonga People of North-Western Rhodesia*. London: International African Institute.
- Magadza, H. D. C. (2006) Kariba Reservoir: Experience and lessons learned. *Lakes & Reservoirs: Research and Management*, 11: 271-286
- Price, N. (1995) The Social and Institutional Context of High Fertility Amongst the Gwembe Valley Tonga of Zambia. Kynch, J. (ed.) *Centre for Development Studies Swansea*. University of Wales Swansea.
- Richards, A. & Widdowson, W. (1937) A Dietary Study in North-Eastern Rhodesia, *Africa: Journal of the International African Institute*, 9: 166-196
- Ruthenberg, H. (1980) Systems with Permanent Upland Cultivation. *Farming Systems in the Tropics*. Oxford: Clarendon Press, pp.174
- Scudder, T. (1962) *The Ecology of the Gwembe Tonga*. Manchester: Manchester University Press.
- Scudder, T. (1985) *A History of Development in the Twentieth Century: The Zambian*

*Portion of the Middle Zambezi Valley and the Lake Kariba Basin.* Clark University: Institute for Development Anthropology.

Scudder, T. & Colson, E. & Scudder, M. (1982) An Evaluation of the Gwembe South Development Project, Zambia. *IDA Working Paper Series.*

青山道夫 (1963) 「高原トンガ族 (Plateau Tonga) 一種族的事例研究」青山道夫編『アフリカの土地慣習法の構造』アジア経済研究所: 143-211

淡路和江 (2006) 『ザンビア南部半乾燥地におけるソルガム栽培—干ばつ時の作物の生育と農民の戦略の視点から』博士予備論文. 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

千葉徳爾 (1993) 『地域と自然』大明堂

中村哲也 (2007) 『ザンビア南部丘陵地における農耕民トンガの生業に関する研究』博士予備論文. 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

遊磨正秀 (1993) 「タンガニイカ湖の自然保護」堀道雄編『タンガニイカ湖の魚たち—多様性の謎を探る』シリーズ地球共生系, 6. 平凡社: 224-239

参考 URL (2008 年 10 月閲覧)

Kureya, T. (2007) The Zambezi: A Rich Source of Fish. *State of the Environment Zambezi Basin*: IMERCSA  
<http://www.sardc.net/IMERCSA/Zambezi/ZNewsletter/issue3of1/fish.htm>

## 謝辞

本研究は、総合地球環境学研究所のプロジェクト「社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス」（代表者：梅津千恵子）にプロジェクトメンバーとして参加して得た資料に基づいている。現地調査の実施にあたっては同プロジェクトから支援を得た。梅津千恵子先生をはじめ、同プロジェクトに携わる多くの方々から調査に対する支援と貴重な助言を賜った。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の諸先生、研究員、院生方からも有益なアドバイスをいただき、とりわけ島田周平先生（京都大学大学院同研究科）には調査準備の段階から博士予備論文の執筆に至るまでご教示いただいた。10ヶ月のザンビア滞在期間中、ザンビア大学の Gear M. Kajoba 先生（地理学部）、Chileshe L. Mulenga 先生（社会経済研究所）や多くの方々から、調査の協力・助言を拝受した。調査地で活動する NGO スタッフの方々には公私にわたり支援していただいた。そして M 村地域の友人・家族たちは私を温かく迎え入れてくださった。ここに改めて感謝の意を表したい。最後になったが、本研究が「社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス」プロジェクト、ひいては M 村地域の方々の一助となることを願っている。

## List of Working Paper

- No. 2008-001 Moses Mwale, *Synthesis of Soil Management Options for Better Targeting of Technologies and Ecological Resilience under Variable Environmental Conditions*
- No. 2008-002 Thamana Lekprichakul, *Impact of 2004/2005 Drought on Zambia's Agricultural Production and Economy: Preliminary Results*
- No. 2008-003 Gear M. Kajoba, *Vulnerability and Resilience of Rural Society in Zambia: From the View Point of Land Tenure and Food Security*
- No. 2008-004 Lawrence S Flint, *Socio-Ecological Vulnerability and Resilience in an Arena of Rapid Environmental Change: Community Adaptation to Climate Variability in the Upper Zambezi Floodplain*
- No. 2008-005 Tetsuya Nakamura, *The Livelihood of 'Escarpment Tonga': A Case Study of One Village, Southern Zambia*

## **Vulnerability and Resilience of Social-Ecological Systems**

Resilience Project Home Page: [www.chikyu.ac.jp/resilience](http://www.chikyu.ac.jp/resilience)

社会・生態システムの脆弱性とレジリアンス

レジリアンスプロジェクトHP: [www.chikyu.ac.jp/resilience](http://www.chikyu.ac.jp/resilience)

## **Research Institute for Humanity and Nature (RIHN)**

Inter-University Research Institute Corporation, National Institute for the Humanities

457-4 Kamigamo Motoyama, Kita-ku, Kyoto, 603-8047, Japan

[www.chikyu.ac.jp](http://www.chikyu.ac.jp)

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

総合地球環境学研究所

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4

[www.chikyu.ac.jp](http://www.chikyu.ac.jp)